「子にしよう」

エペソ人への手紙１：５

September.26.2021

エペソ人への手紙１：５（パワポ）

Preface

前回のエペソ書の学びから少し日が経ってしまいましたが、今日は、今お読みしたエペソ書１：５の箇所から、「父なる神様がイエス・キリストによって、私たちをご自分の子にしよう」とされたことについて考えていきたいと思っています。

この５節の御言葉を何気なく読みますと、当然のことと思い込み読み流してしまうかもしれませんが、少し気にかけながら読んでいきますと、「ご自分の子にしよう」という言葉の不自然さに気付きます。

なぜ不自然かと言いますと、「自分の子にしよう」という親の意思・選択のもと生まれてきた人は誰一人としていないからです。

すべての人は生みの親から生まれてきましたが、誰を生むのか、どんな子を生むのかという親の明確な意思と選択のもとに生まれてきた人は誰もいません。

つまり、人が生まれるということにおいては、「この子を私の子にしよう」という親の意思や選択などの入る余地は全くないということです。

「この子を自分の子にしよう」という思いを具現化できるのは、もうすでにこの地上に命をもって生まれた子供に対して、大人が発動できる選択です。

即ち、「養子にする」ということです。

この５節に出てきます「ご自分の子にしよう」という言葉は、原語を直訳しますと、「養子にしよう」という言葉になります。

でも、訳されている言葉は「養子にしよう」ではなく、「自分の子にしよう」です。

なぜ、「養子にしよう」ではなく、「自分の子にしよう」と訳しているのかなあと考えますと、たぶん、私たち読み手に誤解を抱かせないためだと思います。

どんな誤解か？

実際は、「実子である」ということよりも、「養子にする」ということの方が、この子を我が子にするという親側の意思がはっきりと表れていますし、強く、尊く、愛の行為であるにもかかわらず、「養子にする」ということを「実子である」ということよりも、意味合い的に弱く取ろうとする理不尽な主観が日本社会に

あることを考慮して、「養子にする」ではなく、「自分の子にする」と訳したんだと思います。
こう訳すことによって、“自分の子以上に自分の子とした”という意味合いを際立たせたかったんだと思います。

もちろん、これはこれで素晴らしい訳だと思いますが、逆にその意味合いをより鮮明にするために、私個人的には、英語の聖書の訳のように「養子にする」と直訳しても良かったんじゃないかなあとも思っています。

この「養子にする」という訳でもよかったんじゃないかと思えた、胸がジーンとするひとつの実話を伺ったことがあります。

アメリカでの話ですが、ある小学生の男の子が、自分が養父母に育てられている養子であることをもって、クラスでいじめに遭ったそうです。
泣きながら家に帰り、そのことをお母さんに話しました。
すると、お母さんがその少年にこう言いました。
「あなたは、お父さんお母さんにとって、掛け替えのない尊い無二の息子なの。私たちは幼いあなたを見て、あなたを私たちの息子として育てたい、私たちの息子にしたいと思って、あなたは私たち夫婦の子どもになったの。
明日、学校に行ってあなたを傷つけた子たちにこう言ってあげなさない。
『僕は、僕のお父さんとお母さんの明確な意思によって、僕のお父さんとお母さんに選ばれた、お父さんとお母さんの尊い息子なんだ！
このクラスの中で、僕は唯一、お父さんお母さんの選びによって、僕のお父さんとお母さんの子どもになれた誇らしい子どもなんだよ！』」

ものすごい言葉ですよね。
「血は水よりも濃い」ではなく、「意志による選択は、血よりも濃い」ということです。
自分の子以上に自分の子だということです。
この男の子は、このお父さんとお母さんの明確な意思によって、新しく生まれた子どもとされたんですね。

聖書でも、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることは出来ません」と言いながら、父なる神のご意思に従って、神の子として新しく生まれ変わることの重要性について教えてくれます。

Part One

神様が、「私たち罪人をイエス・キリストによってご自分の養子にした」という聖書の教えは、「実子である」以上のことです。

父なる神の実子は、イエス・キリストお一方だけです。

福音書の記述を見ますと、ヨハネから洗礼を受けたイエス様に向かって、神様が天から、「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」という声をおかけになったことを記しています。
また、イエス様も神様のことを人々の前で、父と呼びました。

そんな神の実子であられるイエス様を、父なる神様は、私たち罪人を神の養子とするために十字架にお掛けになりました。
父なる神は、私たちを養子とするために、実子の命を差し出だされたわけです。

私たちイエス・キリストによって神の子とされた者たちの命の価値は、神の実子イエス様の命の価値以上だと思わせるほどの命です。
またその存在は、神の実子以上に尊い存在だということです。

とてつもないことを今、あまりにも簡単に言い表していますが、このとてつもなさは私たちの理解を遥かに超えていて、このとてつもなさを私達はよく理解できていませんし、理解できる人は誰一人としていません。

子とされた私達の理解の度合いに関わらず、私達は、「わたしの実子以上に、わたしの子とするんだ」という神の覚悟と決心と決意のもと子とされた者たちです。

養子になるというのは、ある意味、実子であるということ以上の深遠な意味があることを聖書は教えてくれます。

Part Two

また、父が子だと宣言することは、その子を正式な法的相続人として立てる、認めるということでもあります。
父の所有のすべてを与えても惜しい物なんか何一つなく、あげてもあげてもあげ足りない程の存在が子だということを聖書は教えてくれます。

イエス様が教えてくださった放蕩の息子の例えにそれが良く表れています。

ルカの福音書に記されている放蕩息子の話は、放蕩してボロボロになった息子を父親が限りない愛をもって受けとめ、赦したという心に響く感動劇の印象が強いですが、この感動を何をもって表現するかと言いますと、生々しいお金の話をもって、私達にその感動を実感させます。

私達が、何よりもお金に感動を覚えるということを、当然のようにイエス様は知っておられました。

ここ最近、巷のメディアでもよく話題に上り、週刊誌などでも特集を組むよう

な財産相続の話が、放蕩息子の例え話にも出てきます。

その話の中で、まだ生きている父親に向かって「お前なんか死んでしまえ！」と言わんばかりの遺産相続を急かした次男の言う通りに、その子が我が子であるがために、父親は財産の生前分与をします。

どんなにどら息子で、すねっかじりで、世間知らずで未熟者の不当な主張であっても、我が子であるがために、「死んでしまえ！」と吐き捨てた者に「お前なんかうちの子じゃないし、お前に与える財産なんぞない！」と追い出すのではなく、財産を分け与えます。
これは父親自ら、子どもの前で、子供のために死んだという事を認める行為です。

イエス様は、この話を通して何を仰りたかったのかと考えますと、神ご自身の私達の父となる覚悟と決心について伝えたかったんだと思います。

子にするというのは、その子がいつの日か成功し栄光の座に着いた時、または人格者になった時に、その時初めて我が子にするということではなく、子であるという事実から始まります。
そこには、出来不出来はありません。

ある程度子供を育ててみて気に入ったら、その時初めて出生届を出し、気に入らなかったら出生届を出さない、または出生届を出した子であっても、後に気に入らない言動をしたら追い出すなんていうようなことは、まずありません。

これにも増して、この放蕩息子の話に出てくる父親は、「あんたが死んだ時、俺が受ける分の財産を今よこせ！」と無礼極まりない息子に対しても、息子が望んだように財産を分け与えることをもって、「あなたは、私の愛する正式な法的相続者である」ということを公に宣言するような行動を執ります。

ここまでのことは、私達にもめったに出来ることではありません。
しかし、神はそれまでもなされ、それほどまでに、父であり、子であるということを全うされる方だと教えてくれます。

その子がどんなに愚かでも、どんなに失敗しても、どんなに不誠実であったとしても、神は一度子としたその子を拒むことはないということを遺産相続という生々しい話を用いて、私たち読み手の肌で感じ取れるように教えてくれます。

誰もが、親から大なり小なり傷を受けて育ちますし、また子に傷を与えながら生きています。
そして、その傷があまりにも大きくて、「親子の縁を切ってしまいたい」と思

うような親子関係があることも事実ですが、そんな傷を負った私達に、誠実なまことの父となって下さる父なる神様がいらっしゃることを、イエス様は教えてくださいます。

旧約聖書の最後の最後の言葉に、

彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる　マラキ書４：６（パワポ）

という言葉がありますが、“彼”に例えられているイエス・キリストを信じることをもって、私達の家庭の親子関係が回復するという恵みに与ることだとも解釈されたりもしますが、それ以上に、神の実子であるイエス様の命を懸けた仲介・橋渡しによって、唯一まことの神が私たちの父となり、私たち罪人が神の子となることを預言しています。

Part Three

マタイの福音書６：２５－２６，３０－３２（パワポ）

この箇所は、「神様が養ってくださるから仕事なんかする必要ありません」ということをイエス様が仰っているのではなく、「誠実に仕事はするのだけれども、その仕事から得た収入によって生きていると思って生きた時、人は貧しくなるんです」と、「天の父なる神様と子の関係に生きる時、人は富むんだ」という事を教えてくださっています。

イエス様はここで、「空の鳥にとって、野の草にとって天の父なる神」とは仰らず、「あなたがたの、天の父」と仰います。
「空の鳥よりも、野の草よりもはるかに尊く、父なる神の子である価値ある存在があなた方なんだ」ということを悟らせるために、イエス様はこの話をしてくださいました。

またこの箇所で、以前の私にはよく見えなかった言葉があります。
それは、３２節の「あなたがたの天の父が知っておられます」という言葉です。

“知っていてくれる”ということだけで、どんなに励まされ、どんなに癒され、どんなに力になるのかということを、つい最近実感したことがありました。

歩いて１０秒の近所に住むある子育て中の教会員の方が、うちの家内に「近くにすぐ助けてくれるご両親もおらず、自分の生まれ育った国ではない外国で、４人の子どもの子育てをすることがどれだけ大変なことなのか、本当によく分かります」と声をかけてくださいました。

私が帰宅した時、その話を家内がしてくれだのですが、「“知っていてくれる”ということがこんなにもありがたくて、感謝で、力になるのか」と心の中がほっこりして癒されるような感じを私たち夫婦一緒に感じました。

ただこの話には落ちがありまして、家内は、こんな言葉を付け加えました。
「４人の子どものお母さんでいることよりも、あなたの妻でいることの方が大変だけどね。」

すみません。話が反れましたが、知っていてくれるということほど、力になるものはありません。
現代において最も重要なのは、経済力でもなく、軍事力でもなく、知力や体力でもなく、共感力だとも言われたりしますが、実のところ、どの時代にあっても、この共感し共感されることこそが、本質的な力なんだと思います。

３５００年前、エジプトの奴隷の身分にあったイスラエルの民たちにも、神様は、「わたしはあなたがたのことを見て、聞いて、知っている」と「わたしはあなた方に共感している」と声をかけて下さいました。

「わたしはあなたの痛みを知っているし、辛さも知っているし、苦境も知っている」という言葉が、どれだけ大きな励ましとなり、力となったことか…

結局のところ、人が何と戦っているのかと言いますと、「自分のことを知って欲しい」という事と戦っています。

天の父なる神様は、子である私たちのことを知っていてくださっています。
髪の毛の数さえも、すべて知っていてくださるお方が父なる神様だと聖書は言います。

放蕩の息子の父は、誰も共感なんか出来ない息子の痛みを知り、その痛みに共感してくれました。
そして、それがその息子の力になっていきました。

神の御子イエス様は、命を懸けて、体を張って、主なる神様が、私たちのすべてを知っていてくださる父なる神であることを教えてくださいました。

Conclusion

最後に、第一ペテロの手紙を見てみたいと思います。

ペテロの手紙第一１：３－９（パワポ）

イエス・キリストを信じる信仰によって、たましいの救いを得ている私たちは、

まぎれもなく神の子です。

神の確固たる意志と選びによって、新しく生まれた神の子です。
神の子であるからには、朽ちることのない天の資産を受け継ぐ相続者でもあります。

ただし、その相続に与るためには、今しばらくの間、この地上で与えられた使命に生きなければなりません。

どんな使命か？
人を愛し、神を愛するという使命です。
他の人を自分よりも優れた者と思い、裁くよりも包容し、自慢するよりもひとつとなることを求め、父なる神の愛を示していくことです。

そこには、試練が伴います。
悲しみも伴います。
しかし、それは、私たちを神の御前に聖なる傷のない者へと精錬するための道です。

先週ありました同盟教団宣教１３０周年大会で、理事長の朝岡勝先生が心震わされる御言葉の説き明かしをしてくださいましたが、そのお話の中で用いられた「腹をくくって」という言葉が、妙に心に刺さりました。

腹をくくって、実子であるイエス・キリストを十字架に架けて、私たちの罪を贖い、私たちをご自分の子にしてくださった父なる神様に、腹をくくってついていきたい、その愛に生かされ続けたい、与えられた使命に生きなければと思わされました。

ペテロやパウロも勧めます。
朽ちることも、汚れることも、消えていくこともない資産を受け継ぐために、神の子として腹をくくれること、何と感謝なことでしょうか。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ人への手紙１：５